『新しい学校』一九五二年十一月（興文館）

勤労教育の場としての特別教育活動

矢口新

一

実を言うと、勤労教育というのは私には耳新しい言葉である。何か異様な感をいだかせる言葉である。しかし勤労ということが、人間の身についた態度なり、知慧であるならば、それは教育の問題とならないことはない筈である。勤労というのは、一体何であるか。

勤労という言葉は、私には何となく道徳的なにおいのする言葉だと感ぜられる。労働とか作業とかいうと、客観的に或る種の人間の行動をさすように考えられるが、勤労はそれより主観的であるように感ぜられる。それはもちろん習慣的なものであろうと思われるが、問題は言葉ではなく、人間の働きについて、ただ客観的ばかりでなく、主観的なものとしてみることが出来るということは見逃してならない点であろう。

労働とか作業とかいうと、いろいろな対象に対して働きかける人間の行動の中、生産という社会的意味をもったものを言うのであろう。その場合には、労動の社会的意味において行動が位置づけられているのである。行動の結果（或は目的でもよい）が社会的に或る物を生み出すということによって労働と考えられている。いわば客観的な関係によって考えられるのである。

しかし労働というこの種の人間の働きについては、もっと異った面からこれを見ることが出来るのである。即ち労働は上のように社会的な意義をもって、成立するものであるが、これを個々の人間の仕事として見るならば、また様々な意味をもっている。社会的労働であるためには、もとより一定の技術的表現をとるが、そういう技術をもって、また一定の人間関係の中において精神をはたらかして仕事をするのである。それらのことは社会的なものとしてとらえることが出来るけれども、同時にそれが成り立つためには個人個人の人間的働き方、行動の仕方という要素があるのである。いわば労働には個人的な基礎があるといってよいであろう。

即ち労働は個人がただ一定の労働対象に対して、一定の技術を働かし、そこに生産を行い、その労働に対する報酬を獲得するという客観的な関係でだけなり立っているのでない。それはもちろん大きな要素であるが、そういう社会的な労働を成り立たせる人間的な要素があるのである。即ち例えば肉体の疲労を精神力で克服して、一定の社会的な責任を果さねばならぬこともあろう。苦しいことを耐えて行かねばならぬこともあろうし、悲しみをこらえねばならぬこともあろう。技術には決してこれでよいという限界はなく、無限に精進によって進歩するものである。だから技術の修練についての苦心もあれば、面白みもまた感ずることが出来るのである。

このように考えれば、労働はただ金銭とひきかえにしたところの客

観的な労働たるのみでなく、常にそれ以上のものである。そうして一般に労働という言葉は、とかくその客観的意義のみが強調されて、その人間的な性格が度外視され勝ちである。それに対してこの労働の人間的要素を強く意識して、むしろ個々人の人間としての営みとしてみた場合には、労働というよりは勤労といった方がふさわしいのではないだろうか。私は勤労という言葉に、この様なニュアンスをつけてみるのがふさわしいと思うのである。とすれば勤労というのは、すぐれて人間的な言葉だとも言えるのである。

労働はただ金銭とひきかえに提供して、それで金銭を獲得するという形式的なものではない。或はそういう図式によって解釈されてしまうものではないのである。それは労働する人間に対して大きな影響を与えるのである。金銭イコール労働というように割り切れてしまう平板なものでない。労働することが直ちにその人間の人間性を育てたり、人間を変化させたりするのである。労働によって人生の深い意義にふれたり、世界観をもったりするのである。これは言いかえれば労働の文化的意義、或は人間形成的、教育的意義ということが出来よう。

いかに社会的な労働の意義を強調しようと、このような労働の人間的意義は無視することは出来ないのである。もし労働を単に金銭を獲得する手段としてのみ割り切るならば、そこにはいかに貧しい世界が、淋しい世界が出現することか。幸にして、そういうことが出来ないところに人間の労働たる所以があるのであろう。

このように考えると、労働の人間的な側面としての勤労性ということに注目し、それを視点として勤労教育を考えるということはきわめて意味深い事だと思う。そういう勤労性を人間に自覚させ、またその正しいあり方において労働する態度、いわば勤労的態度を身につけさせることは非常に重大なことである。労働の人間的意義を理解し、これに即した態度で労働する心構えをもたせることによって、正しい人間的成長がとげられるであろう。子供の頃から正しく労働させ、勤労精神をもたせることにより、大人になっても正しく労働し、その正しい労働によって、また人間的成長をとげうる人間となるであろう。

私は勤労教育というものをこのように考えてみたのである。

ニ

戦争前から戦争中へかけて、学校教育の中に勤労奉仕とか、勤労作業とかが多くとり入れられたことを思い起す。勤労教育という言葉はともすると、あのすさまじい勤労作業を思い起させて、私にとっては決して愉快な言葉ではないのである。恐らく多くの人がそのような感想をもっているのでないだろうか。

労働の人間的側面たる勤労性などというものは、その本質上確かに実践的な教育方式をとるべきものであろう。何故なら労働の合理的な解釈、理想的な解釈といえば何といっても社会的関係、客観的関係のことになるのであり、それが人間精神の働きを通して人間自身に大きな影響をもっているということは、感性的な理解を必要とするのである。いわば自ら感得してはじめてわかることとも言えることなのである。やはり主観的なものである。そこでこれを感得させるということに重点をおくと、ともすればあの戦争前や戦争中のような、がむしゃらな強制的勤労作業になりかねないのである。それは何も本質的に、必然的にそうなるというのではない。しかし余程の慎重な注意がともなわないと、そうなる恐れはあるようである。

戦争時代の勤労作業が、われわれに好ましからざる思い出となって残っているのは、どこにあるのであろうか。それは恐らく一言にして言えば、その方法が人間性を没却していたからでないだろうか。これは一見極めて奇妙なことである。本来勤労ということは人間的なものであった筈である。ところがそれが人間性を没却していたとはどうい

うことであろうか。かりにも勤労作業といわれながら、そういうことがあり得るのであろうか。

労働の勤労としての意義は結局は勤労する生活において感得出来るものであろう。ここに大きな陥し穴があったのである。勤労する生活が与えられるかわりに、ただ労働する生活が与えられるのである。そしてそれが勤労という美名の下に強制されるのである。そうすると人間はただ対象に対して労働を行い、生産と結果を生み出すだけの機械的な、形式的な行動を強いられることになるのである。

それは勤労の個性的な意味が忘れられてしまうからである。勤労は上にのべたように、人間的なものに目をつけた労働であるが、そういう労働は実は個性的なのである。言いかえれば、労働とは近代社会の中に生れた個性を没却した働きに対する言葉だといってもよいのである。あらゆる人間の働きを機械的に考え、形式化し、単純化し、そこにただ機械的能率をのみ考える労働が近代的労働の方向なのである。この方向で人間に労働を押しつけるならば、人間は単なる使役として使われることになり、到底人間的なものをその中に発見することは出来ないであろう。かくの如き労働の押しつけを以て勤労奉仕と称するならば、これは勤労教育とは縁の遠いものといわざるを得ないであろう。

近代社会の労働が人間を没却しつつあるとはよく言われるところであるが、これは教育の世界では特に反省を要することである。資本主義社会や、近代の機械生産が労働において人間性を没却しようとしつつあることに対しては、他ならぬ教育の側からまず第一に是正の烽火があげられて然るべきものであろう。それこそ勤労教育のなすべき任務でなければならない。とすればこれは単なる労働の一律な押しつけでないことは言うまでもないことである。反対に個性と労働との結合が考えられねばならないのである。

さてこのように考えるとかつての勤労作業でなく、勤労教育が行われるためには、学校環境の根本的な改造が必要なのではないか。学校は現在はむしろ一般的、共通的な仕事が中心であり、個性よりは一般性が重視されている。鉢巻をして廊下の掃除や雑巾がけを行わせるというような、一般的な形式が現代の学校には強いのである。それは決して勤労教育を行う所以ではないのである。

三

近代の学校は労働の世界からは遠ざかっている。むしろ閑暇な生活から生れた知識を与えることが、学校教育の目的であったと考えられてさえいる。この論議はともかくとして、一般的に近代学校が労働ということから離れていることは注目すべきことである。

そういうところでは、勤労ということも一つの知識として教えられたのである。修身における二宮金次郎の物語は我々のよく覚えているところであるが、これは過去における勤労教育であったということが出来る。このような知識的な教育以外に、勤労教育の場と考えられるものはなかったといってよいであろう。たまたまそういうものが強調されると、とかく封建的な強制労働の形態をとりかねないおそれがあった。労苦に耐えるということが強調され、がむしゃらな労働が課せられ、そこに労働の尊さを感得させるのだというようなことが言われたのである。これは労働というものについての旧式な考え方の産物である。

これに対して、今世紀のはじめ頃から新しい考え方として労作教育、作業教育という思潮が起って来た。これは勤労教育とは多少異った考え方であるが、勤労の人間的意義、その教育的意義に対する認識を基礎にして、それを教育の方法として主張する立場なのである。だからこれは勤労教育の一つの方式だというように考えることも出来るのである。或はまた逆に勤労と教育との関連の中、勤労教育というのは主として勤労の精神や、或は態度を目標とした教育と狭く考えられる

に対して、労作教育とか作業教育とかは、より広く教育と労働や作業とを結びつけようとしているとも言えよう。

勤労教育というものをその中核である道徳性という点に着目して言えば、これは狭い意味に考えられたものと言うことが出来よう。しかし勤労とは結局はモラルだと言うことは出来よう。だからその意味からは狭いけれども鋭いと言うことが出来る。しかしその教育の方法ということから考えるならば、これは教育の両面において労働を通し、作業を通す教育によってはじめて勤労についての教育が可能になると考えられるのである。このように考えるならば、勤労教育は近代の学校教育の方式に対して、大きな変革を求めることになるのである。これはしかし早急には成立し得ないことであるかも知れない。

最近小学校、中学校のカリキュラムにおいて特別教育活動、就中自治活動という分野が開けつつある。これは児童生徒の生活自体を通じて、生活態度を感得させようとしているものといってよいであろう。それは実践的な社会生活として組織的に営まれる。それは自治的な共同社会に対する個々人の自主的な実践という形で営まれている。そこに生活態度の感得が結果するのである。この特別教育活動は、新しい教育の方向を示すものと思われるけれども、それはまた新しい勤労教育の場として注目してよいことである。

自治活動における児童生徒の仕事は、その共同社会生活において明確な位置づけがなされている。児童生徒は単に自分の好む仕事をするという、個人主義的な仕事の仕方をするのではない。しかしだからといって、ただむやみやたらに大人によって強制されるのでない。自治的な生活として納得して奉仕をするのである。それは強制労働ではないのである。むしろ自主的な労働なのである。これを通じて児童生徒の人間的成長が意図されているのである。そこでこの仕事はとりも直さず児童生徒にとっては、勤労としての意味をもつと言うことが出来る。とすればこれは勤労を通じて、勤労に対する感性的な理解をさせているということになるのではないか。これこそ勤労教育者としては、最もふさわしいものと言うことが出来るのではないであろうか。

しかしこの場合に自治活動については一言しておかなくてはならぬ。それはこういう勤労教育としての意味をもったものならば、それは具体的な仕事をしてゆくものでなくてはならぬということである。望み得るならば、新なるものを生み出すものが欲しいということである。自治活動というと、とかく委員会による会議の如きものが考えられる傾向があるが、ここで言う自治活動はむしろいわゆる各部活動といわれているところの生活領域に亘った、具体的な生活活動である。

一、二の例をあげるならば、図書部というのは図書の購入・整理・貸出・修理等の仕事をする単位機関である。ここで児童生徒は共同社会の一つの機能を担当して、労働を提供するのである。或はまた学校の保健衛生のために、清掃をし、健康な環境をつくるために労働を提供するのである。それはただ単に労働を提供するのみでなく、責任を以て自主的に行動すると共に、それによって自己自身を育ててゆくのである。こういう生活を通じて勤労ということを感得してゆくのである。

勤労教育というのは、勤労を通じて勤労生活に入るということであろう。それは人間と環境との一体化ということによって成しとげられて行くものである。ただ盲目的に働くということでは勤労にならないのである。環境の不合理は不合理として是正する勇気をもたなければならぬ。しかしただ環境に反発するだけが問題でない。やはり勤労を通じてそれが是正されて行かねばならぬ。いわば環境と人間との調和を通じて、そこに勤労ということが体得されるのである。

特別教育活動が環境の改造を目ざした、自立的な生活組織であるということは、勤労を体得させる上に最もふさわしい地盤であると言うことが出来よう。

（おわり）